

高畠小学校 平成30年度 校内研究全体計画

1. 研究主題

主体的に学ぶ子どもの育成

～自分事として つかむ・かかわる・かわる～

2. 主題設定の理由

(1) スローガン、目指す学校像、目指す子どもの姿から

スローガン : 自立をめざし 強く鋭くのびやかに はばたけ若鷲っ子
目指す学校像 : 学びが楽しい学校 心のやさしい学校 健康でたくましい学校

めざす子どもの姿

- ・自ら学び 自信をもって 自分を表現する子ども
- ・学び合い 認め合い 高め合う 子ども

本校では上記のめざす子どもの姿を掲げ、自ら進んで学習や活動に取り組む自立した児童の育成に努めている。そのために、昨年度は「つきたい力の明確化」「『できる』『わかる』達成感のある授業づくり」「有用感のある学びの保障」という3つの柱と研究の土台を意識し、それらをもとに2つの重点を設けて授業づくりを進めてきた。今年度は昨年度の成果と課題をふまえ、「つきたい力(ねらい)の明確化」「魅力ある単元づくり」「自己の変容を実感できるふり返し」の3点を「研究を支える3つの柱」として意識しながら、2つの重点を設定し取り組んでいく。また、昨年度以上に一人一人の教員が校内研究に対する意識を高め一丸となって実践を進めていけるよう、指導部の連携をより密にして土台作りに努めていく。

(2) 児童の実態から

本校の児童は、課題に対して、まじめにこつこつと取り組むことができる児童が多い。自主学習にもほとんどの児童が毎日取り組んでおり、基礎基本の定着が図られてきている。しかしながら、基礎基本を活用して問題を解いたり、新しい課題の解決に取り組んだりすることを苦手としている児童がみられ、発展問題や活用問題となるとなかなか解くことができない児童も多い。そこで、授業を行う際に、基礎基本として身につけた内容を活用して自分の考えを表現するとともに教科の重要語句や用語等を活用しながら説明する活動を取り入れてきた。

また、自分の考えを堂々と表現するためには、児童同士の温かい人間関係と、安心して過ごせる居心地のよい教室が不可欠であり、昨年度から道徳教育やQUを活用した集団づくりに力を入れてきた。今年度はさらに学級活動の時数を増やし、これまで以上に児童同士の心の結びつきを強くし、安心して話し合える場を設定していきたい。

(3) 教師の願い

学びの自立を目指し、一昨年度は子どもが主体的に学んでいくための教師の立ち位置・支援のあり方について研究を進め、課題設定・課題提示の工夫、言語活動の工夫や、まとめ・ふり返りの仕方を重点としながら実践してきた。児童の主体的な学びを支えていくために、昨年度は「①子どもが自分の伸びを実感できる授業」「②全員が授業に参加し、『本気』で考える授業」「③児童同士が学び合う授業」の3点を目指し、実践してきた。目標に近づくために、「つきたい力の明確化」「『できる』『わかる』達成感のある授業づくり」「有用感のある学びの保障」という3つの研究の柱及び「校内研究の土台」を軸として教育活動を進めてきた。これまでの実践をふまえ、今年度は「つきたい力（ねらい）の明確化」「魅力ある単元設定」「自己の変容を実感できるふり返し」を3つの柱としながら主体的に学ぶ子どもを育成し、学びの自立につなげていきたい。

(4) 今日の教育課題から

山形県教育委員会では、「第6次山形県教育振興計画」において、探究型学習の推進を掲げつつ、「つなぐ」をキーワードとしながら、「確かな学力」の育成を目指している。そして、そのキーワードの下、教師が学びやカリキュラムをつなぐとともに、児童には主体的・協働的な学びで精一杯考え、表現させることを大切にしながら、「確かな学力」を育成することをねらっている。（「確かな学力」とは、「○基礎的な知識・技能 ○思考力・判断力・表現力等 ○主体的な態度」のことを示す。）「確かな学力」育成のための授業づくりのポイントとして、「児童生徒の既習の知識等をつないで、自分の思考を深める」「児童生徒が本時で学んだことをつないで、他の問題解決場面でも活用できるようにする」が盛り込まれている。

また、「おきたまの教育」の今年度の重点の一つとして、「考える力を育む授業づくり」がある。その重点の中の一つ目が、「子どもの学びをつなぐ探究型学習の推進」であり、子ども主体の学習を推進している。これまでの「一斉授業」から「考える授業・学び合う授業」へと、教員の指導観の転換を共有化していくことで、確かな学力を育てていきたい。今年度は探求型学習推進校の指定を受け、高畠中学校と連携を行っていく。発達段階を見通し、小中が連携しながら授業づくりを行うことで、子どもたちが主体的に学んでいく力を育てていきたい。

さらに、今年度はパナソニック教育財団の研究助成を受け、ICT 機器を活用した学習を推進していく。ICT 機器を効果的に活用していくことで、みんなが「わかった」「できた」と実感できる授業づくりを目指し、教育研究に取り組んでいく。

以上の点から、昨年度まで積み上げてきた実践をふまえ、子どもの学びを支えるためのよりよい教師の関わり方を追求していけば、主体的に学ぶ子どもの育成ができると考え、本題を設定した。

3. 今年度の重点

全員が自分事として参加する授業づくり 「つかむ・かかわる・かわる」を意識した授業づくり

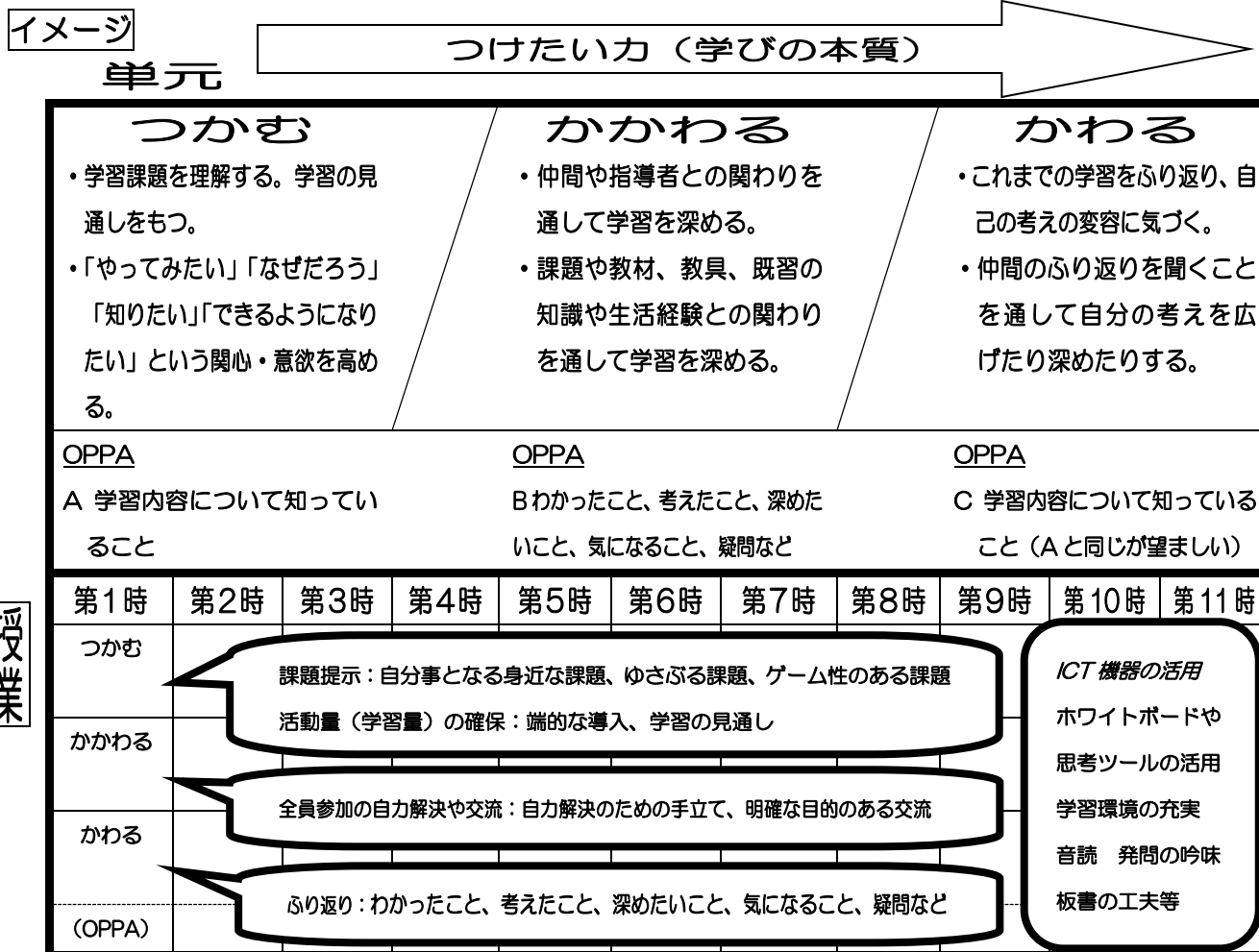
これまでの「子どもの活動量（学習量）を確保した授業づくり」「全員が自分事として参加する授業づくり」を今後も意識していく。さらにそれを土台としたうえで「つかむ」「かかわる」「かわる」の3つを軸としそれらに関連させながら学びの深まり・広がりが見られるよう手立てを工夫・検討していく。

「つかむ」では児童が課題と出会い方について考えていく。魅力ある課題提示の仕方を工夫していく。

「かかわる」では、児童同士のかかわり方について研究を進めていく。交流のさせ方や交流の在り方については29年度の校内研究でも何度も話題に上がっている。今年度も児童同士の学びの深まりや広がりがみられる手立てを検討していく必要がある。

「かわる」では、ふり返りの仕方について研究を進めていく。29年度の2学期から、OPPAシート（※1）を用いたふり返しを行っている。これを用いながら、自己の変容を実感できる手立てを追究していく。

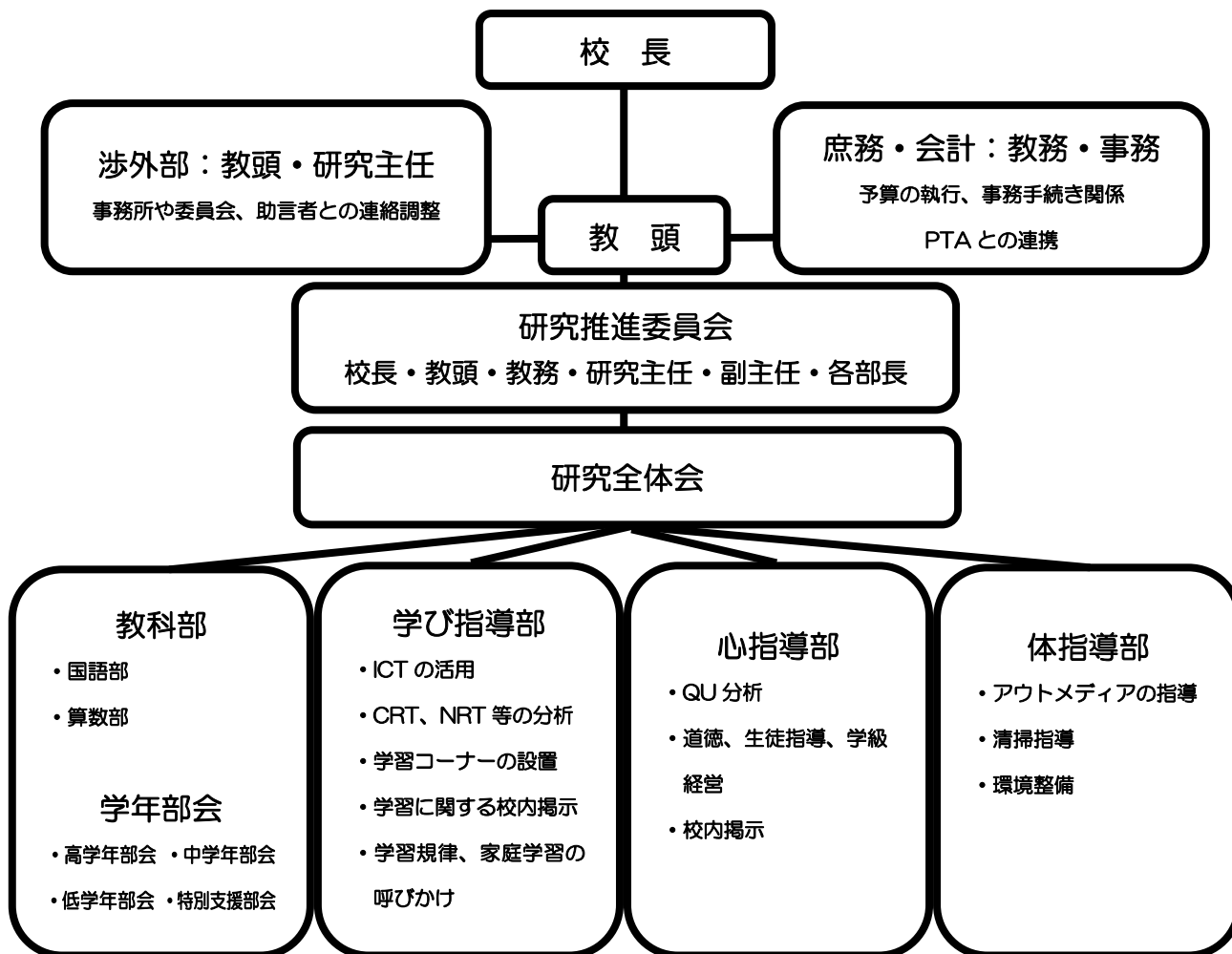
同様に、単元を通して見たときの「つかむ」「かかわる」「かわる」も意識しながら、単元を構成していきたい。



※1 OPPAシート One Page Portfolio +Assessment（1枚ポートフォリオ+評価）

教師のねらいとする成果を学習者が1枚のシートの中に学習前・中・後の学習履歴として記録し、自己評価させる方法。学習による変容を学習者自身が具体的内容を通して可視化かつ構造化された形で自覚でき、その変容から学ぶ意味を感じ取ることができる。教師はそれを見て授業評価に活用することができる。

4. 研究の組織



全体会									
		特支部会	低学年部会		中学年部会		高学年部会		級外
		すすわか	1年	2年	3年	4年	5年	6年	
教科部会	国語部	北澤 大越	◎渡邊	小野春	小野千	藤田	◎野本	☆鈴木	大河原
	算数部	山路	清野	◎今	青野	大地	田村	★芳賀 板垣	和田
		高橋	大河原		和田				

(★研究主任 ☆研究副主任 ◎指導部長)

5. 研究の方法

(1) 授業研究

年間一人一回の授業研究を行う。教科は国語・算数とする。

大研(全校研):全職員が参観する。全体会として事前研究会・事後研究会を行う。

小研(学年部研):学年部を中心に、校長・教頭・研究主任・参加希望者により参観する。学年部で事前研究会を行い、参観者で事後研究会を行う。

必要に応じて、教科部会による事前研究会・事後研究会を行う。

授業中の写真撮影や記録については学年部で分担する。

授業研究は原則12月までに行う。

(2) 校外での研修及び研修報告

本校の研究主題や研究の重点に関わる内容について研究している先進校での公開授業やセミナー等に積極的に参加し、研修報告を通して全職員でその内容を共有する。

(3) 「学びの高小スタイル」の推進

研究推進委員会及び全体会によって、「学びの高小スタイル」を作成していく。

(4) 「校内研だより」の発行と、「研究のまとめ」の作成・発行

研究授業後には、研究授業や事後研究会の内容を学年部でまとめ、「校内研だより」として発行する。また、年度末には研究授業の指導案やその振り返り、研修報告等をまとめた「研究のまとめ」を作成し、発行する。

6. 研究授業について

(1) 1学期の研究授業について

- 全員1回は研究授業を行い、助言者にも授業を参観していただく。
- 各学年の中で1名が全校研(大研)を行う。それ以外の先生は小研を行う。大研は置賜教育事務所または高畠町教育委員会の先生、助言者の先生に参観していただく。小研は助言者の先生に参観していただく。
- 研究授業までには、学年部による学年部事前研と教科による教科事前研を行う。
- 4月上旬には大研及び小研の日程を明らかにし、助言者の方に伝える。
- 大研の事後研は全教員で、小研の事後研は参観者で行う。
- 大研の事後研だよりは推進委員会で発行する。小研は学年部で発行する。10日以内を目安とする。
- パナソニック教育財団の実践研究助成もふまえて、ICT機器の活用も積極的に取り入れていく。

(2) 1学期の研究授業日程（予定）

日 程		研究授業	事後研だより	日 程		研究授業	事後研だより
4月25日(水)	提案授業	6年1組 算数	鈴木	6月22日(金)	小研	1年1組 国語	小野春
5月18日(金)	全校研1 (大研)	4年1組 国語	青野	6月29日(金)	小研	4年2組 算数	藤田
		6年3組 算数		7月6日(金)	小研	5年2組 算数	板垣
5月25日(金)	小研	3年2組 算数	渡邊	7月11日(水)	小研	6年2組 国語	芳賀
6月1日(金)	小研	2年2組 国語	清野	7月13日(金)	全校研3 (大研)	1年2組 算数	野本
6月15日(金)	全校研2 (大研)	2年1組 算数	今			3年1組 国語	
		5年1組 国語		小研	すすわか	特別支援担任	

※5月に学習のユニバーサルデザインに関する研修会を、6月にICT機器の活用に関する研修会を開催する。

※この他、学校OJTや自主公開等での授業研究を参観し合い、お互いに学び合い、よりよい授業づくりに努めていく

(3) 公開授業研究発表会について（予定）

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	特別支援
授業1	国語	算数	国語	算数	国語	算数	すすわか
授業2	算数	国語	算数	国語	算数	国語	

会場(仮)	1-1	2-1	3-1	4-1	5-1	6-1	1-2
協議会1	1年国	2年算	3年国	4年算	5年国	6年算	すすわか
協議会2	2年国	1年算	4年国	3年算	6年国	5年算	

- ・1年国→2年国 のように同じ教科の授業を参観する人、1年国→1年算 のように同じ学年の授業を参観する人など、参観の仕方を選ぶことができるメリットがある。
- ・助言者については「1・2年国語」「1・2年算数」「3・4年国語」「3・4年算数」「5・6年国語」「5・6年算数」「特別支援」というまとまりで計7名の方に助言をお願いする。
- ・協議会1と協議会2の間には休憩（別の教室で行われる協議会に行く参会者のための移動の時間）を設ける。
- ・協議会の司会は同じ学年部で同じ教科の担当（例：1年国の時は2年国の授業者）が行う。授業者、司会、助言者は教室を移動せず、協議会1と協議会2で司会者と授業者が交替する形とする。

(4) 研究の日常化に向けて

- ・職員終会での実践交流やふり返しシートの記入

・OPPA シートづくり ・校内研コーナーの設置（職員室内）…書籍や掲示等

7. 主体的に学ぶ子どもを育むための年間計画

月	主な動き	教育課程 学びを育む指導部	校内研究	授業
4	知能テスト NRTテスト 全国・県学力調査	【学習準備OK週間】 学習規律に関する約束 児童の実態把握	全体会 提案授業	○休み中の課題を受けての補充学習 ○学習規律の 確認
5	QU	【家庭学習・読書が んばり週間】	UD 研修会 全体会 大研 小研	○家庭学習の 充実 ○読書活動の 充実
6	NRTテストの分 析と課題の確認 QUの分析	【子どもと語る週間】	ICT 活用研究会 全体会 大研 小研	○安心感のある 居心地のいい 学級づくり
7		【わかわしタイム】 ※NRT結果の補充	全体会 大研 小研	○活用力を問う 問題への挑戦
夏休みの課題の検討と共有 指導案検討会 職員作業				
8	全国学力調査結 果公表	【学習準備OK週間】	全体会	
9	調査結果の分析 と課題の確認	【家庭学習・読書が んばり週間】		○家庭学習の充実 ○読書活動の充実
10			指導者・助言者打ち合わせ 公開研	○よりよい生活 習慣
11	保護者等への結 果説明	【子どもと語る週間】 【わかわしタイム】 ※2学期のまとめ		○活用力を問う 問題への挑戦
12	学校評価実施	【わかわしタイム】 ※2学期のまとめ		○活用力を問う 問題への挑戦
冬休みの課題の検討と共有				
1	CRTテスト	【学習準備OK週間】 【わかわしタイム】 ※学年のまとめ	究のまとめ作成 次年度に向けて	○活用力を問う 問題への挑戦
2	CRTテストの 分析と考察	【わかわしタイム】 ※学年のまとめ	次年度に向けて	○学年のまとめ
3		春休みの課題の検討と共有		

教育マイスター制度（学校OJT）を活用した授業改善・指導力の向上

・若手教員を中心とした授業研や授業交流及び中堅教員の授業提案
・職員終会時の「先輩教員から学ぶ・若手教員が学んだこと」の交流

